

絵画の教材化―古典学習の拡充に向けて

井上 泰

1 はじめに

中学校の古典学習において絵画テキストはどのように使用されているのだろうか。また、その使用は絵画テキストを十分に活かしたもののだろうか。

例えば、国文学者の三田村雅子氏は、『源氏物語絵巻』の復元を契機に開かれた座談会で「いま改めて、なぜ源氏物語と絵画なのか」と問われて、次のように述べている¹⁾。

古典の古語を学ぶということも、まさにそういうさまざまな周辺知識ついでなもの（井上注、建物・工芸品・景観・季節感など）とともに学びたいと思いますし、絵を読み解く方法を文章を読み解く方法と同じくらい洗練させることもできるのではないかと思っています。補助教材としての絵画ではなく、絵画でなくては語れないものと文字によつて語るものを行き来して、楽しみを増幅していきたいなと思います。

傍線部にみられるように、三田村氏は古典学習において絵画を「補助教材として」扱うのではなく、絵画それ自体を読み解くことで「絵画でなくては語れないもの」を明らかにし、それと「文字によつて語るもの」とを行き来することで、「楽しみを増幅」したいと述べている。ここでいう「絵画でなくては語れないもの」とは、おそらく次のようなものであろう²⁾。

この作品（井上注、『国宝源氏物語絵巻』）はおそらく最初の源氏物語絵巻ではなく、それ以前にすでにいくつか源氏絵巻があったと考えられています。しかしこの『絵巻』は、伝統的な図柄を拒否して新しい独創的な場面を選択したようで、一つ一つの場面構成が独特です。これ以後にもたくさん製作された源氏物語絵巻の場面と、この『絵巻』はほとんど重なりません。たまたま重なりを見せる蓬生巻の末摘花再発見の場面でも、意表を突く場面構成で、荒れた庭に足を踏み入れる光源氏とそれを待つ末摘花を描く他の絵巻・絵図とはまったくちがった表現をしています。類型性にしばられることなく、新しい作品解釈を展

開しており、その読みは並々でない細部に及んで、現在の私たちをもうならせています。美しいだけでなく、作品世界の深みへ引き込んでくる魅力をもった卷々なのです。

傍線部にあるように、「絵画でなくては語れないもの」とはおそらく『源氏物語絵巻』の制作主体の「源氏物語」への「読み」とその「読み」に基づいた「表現」であろう。つまり、『源氏物語絵巻』制作主体の「解釈―表現」過程（絵語り）⁴を読み解くことで、学習者は「源氏物語」の「作品世界の深み」へと引き込まれていくのである。

このように、絵画テキストを文字テキストの「補助教材」としてでなく、文字テキストとは別の、独自のメディアとして読み解くことで、古典学習を拡充させていくことができる。では、中学校の古典学習において絵画テキストはどのように使用されているのだろうか。絵画を独自のメディアとして扱い使用しているのだろうか。

2 教科書における絵画テキストの使用目的とその検討

絵画テキストはどのような使用を目的として、教科書に掲載されているのだろうか。現行の、全社の教科書とその指導書から使用目的を分析すると、次のようにまとめることができる。

- (1) 作者の肖像を示し、作者像を捉える。
- (2) 古典テキストを読むための知識を与えたり、古典世界そのものを知る。

のを知る。

- (3) 物語や詩の情景を思い浮かべる。
- (4) 物語のあらすじを理解させる。

次にそれぞれを詳しく見ていく。

- (1) 作者の肖像を示し、作者像を捉える。

『中学生の国語 二年』（三省堂）には『枕草子』「第四百五十四段」、「第二百七段」の学習にあわせて、上村松園筆『清少納言』（北野美術館所蔵）が掲載されている。『指導書上』（三三頁）「三三図版解説」には次のようにある。

「清少納言」は、松園二〇歳のときの作品で、王朝の雰囲気を表現した肖像画。

「肖像画」とあることから、本図は清少納言の肖像を示すために掲載されていると考えられる。

また、『新しい国語三』（東京書籍）には、『おくのほそ道』「旅立ち」、「平泉」の学習にあわせて、森川許六「奥の細道行脚之図」（天理大学附属天理図書館所蔵）が掲載されている。『指導書研究編上』（二九八頁）「四 学習材の構成」には次のようにある。

・「おくのほそ道」旅程図（折り込み・表）

- (略) また、「奥の細道行脚之図」は、芭蕉の実際の顔立ちを

伝える一枚であると考えられている。

「芭蕉の実際の顔立ち」という解説からうかがえるように、本図もまた作者の肖像を示すために掲載されていると考えられる。

このように絵画テキストは、古典テキストの作者の肖像を示し、作者像を捉えるために掲載されていると考えられる。

(2) 古典テキストを読むための知識を与えたり、古典世界そのものを知る。

『伝え合う言葉 中学国語 二(教育出版)』には、『枕草子』「第一段」『第一百四十五段』の学習にあわせて、上村松園筆『花』が掲載されている。本図には、次のような見出しが付けられている。

右側の子どもの髪が尼そぎ (「雪月花」より「花」上村松園)

『枕草子』「第一百四十五段」「うつくしきもの」には、「尼そぎなるちこ」とある。本図は、現代では想像しにくい当時の風俗を知り文字テキストの内容を理解するために掲載されていると考えられる。

また、『国語 1』(光村図書)には、「七夕に思うー語り継がれ、読み継がれてきたもの」にあわせて、歌川国貞『七夕』(国立国会図書館所蔵)と歌川広重『市中繁栄七夕祭』が掲載されている。『指導書』(三〇頁)「1教材提出の意図」には次のようにある。

現代の我々が古典と地続きの文化の中で暮らしていることを

実感し、自分自身の中にある古典を感じる心を発見することを目ざしたものである。(中略)江戸時代には、一三四頁の浮世絵のように、笹に短冊などを飾り付ける華やかな行事として庶民にも親しまれ、現在の七夕飾りに近いものになっている。

二つの浮世絵は、江戸時代の行事の様子を視覚的に理解させ、『現代の我々が古典と地続きの文化の中で暮らしていることを実感』させるために掲載されている。文字テキストの直接的な補助資料というわけではないが、古典テキストと「現代の我々」とを繋ぐために掲載されているという点においては、文字テキストの補助資料と考えてもよいだろう。

(3) 物語や詩の情景を思い浮かべる

『中学生の国語 二年』(三省堂)には、李白「黃鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る」にあわせて、『唐詩選画本』にある「黃鶴樓」の図と現代の長江を撮影した写真が掲載されている。『指導書上』(三六頁)「3指導と評価の実際」には次のようにある。

第一時 学習活動

3 「黃鶴樓にて…」の、語句の意味や情景・心情を捉える。

指導上の留意点

・二〇頁の挿絵や二二頁の写真を見て、イメージをふくらませるようにする。

傍線部にあるように、挿絵や写真は漢詩で歌われている内容をイメージするために掲載されていることがわかる。

また、『国語二』（光村図書）には『平家物語』「扇的」の学習にあわせて、『平家物語画帖』（根津美術館所蔵）から那須与一が扇的を射る場面が掲載されている。『指導書』（三三二頁）「5参考図版について」には次のようにある。

「那須与一、扇的を射る」

「扇的」の最大の見せ場ともいえる場面を描いた作品だけに、情景を思い浮かべながら朗読する際に、活用したい。

さらに、『指導書』（三九頁）「3指導の展開例」には、

第二時

学習活動④①三頁からの原文を読んで、扇的を射るために、海に馬を乗り入れた与一の思いを考える。

指導上の留意点

・原文を読みながら、「那須与一、扇的を射る（平家物語画帖）」を参照させ、文章とともに情景を想像させる手助けにする。

とある。それぞれの傍線部にみられるように、本図は物語の情景を「思い浮かべ」たり「想像」するための「手助け」として掲載されている。

(4) 物語のあらすじを理解させる

『国語1』（光村図書）には、『竹取物語』の学習にあわせて国会図書館蔵『竹取物語絵巻』が複数場面掲載されている。『指導書』（五九頁）には次のようにある。

3指導の展開例 第1時

学習活動 ③教科書の図版を参考に、全体のあらすじをおおまかにつかむ。

指導上の留意点

・次のような構成を追う。

- 1 かぐや姫の誕生と成長
- 2 貴公子たちの求婚と失敗
- 3 かぐや姫は月の世界に帰る。
- 4 帝が富士山で手紙と薬を焼く。

評価

・興味をもって図版を参照し、場面と照らし合わせて見ている。

傍線部にあるように、絵巻は物語「全体のあらすじ」をつかむために掲載されている。絵画テキストを見せることで物語全体の内容を理解させようという意図がうかがえる。このような使用目的は、『新しい国語1』（東京書籍）にも確認される。『指導書上』（二九二頁）「5表現の特色」には次のようにある。

▼「竹取物語」の中でも、生徒が興味を示しやすいと思われる五人の貴公子の求婚譚を、「竹取物語絵巻」とともに紹介している。作品の理解に役立つとよい。

また、『新しい国語2』（東京書籍）には、林原美術館蔵『平家物語絵巻』が掲載されている。『指導書研究編上』（三〇〇頁）「4学習材の構成」には次のようにある。

・源平合戦の経緯（折り込み・裏）

「平家物語」における源氏と平家の合戦の経緯を、頼朝の挙兵から平家の滅亡まで時系列に沿って大まかに説明し、学習材「那須与一」が屋島の戦いにおけるエピソードであることを示している。また、俱利伽羅峠・宇治川・一ノ谷の戦いの様子を「平家物語」より紹介している。

このように、絵画テキストを見せることで「作品」全体の理解に役立てたり、教材本文の物語全体における位相を理解させるために絵画テキストが掲載されていることが分かる。

以上、絵画テキストの使用目的を教科書及び指導書から分析してきた。やはり絵画テキストは文字テキストを読んだり理解するための「補助資料」として掲載されている。

また、その使用は（絵語り）を分析し考えられたものではない。例えば、『新しい国語2』（東京書籍）には『平家物語』『扇の的』の学習にあわせて、『平家物語絵巻』が掲載されている。『研究編

上』（三〇三頁）には次のようにある。

6 語句・表現

5 皆紅の扇

扇の全面を紅色一色に塗り、中央に日の丸を金箔で描いた扇。なお、教科書掲載の「平家物語絵巻」中の扇は、本文と異なる色で描かれている。

傍線部にあるように、本図は物語に登場する扇を想像するために掲載されている。しかし、波線部にあるように、図は物語本文とは違っている。そして、物語本文と異なる（絵語り）をどのように用いるのかは示されていない。

実際の使用については分からない点も多いが、教科書においては、絵画テキストはその（絵語り）を分析されることなく、文字テキストを読んだり理解するための「補助資料」として掲載されている⁵。では、（絵語り）を読み解くことで絵画テキストはどのように活用させていくことができるのだろうか。

3 絵画テキストの活用の具体

本稿では江戸時代に制作された『竹取物語』の挿絵を用いた実践を報告した⁶。

本学習は、二〇一一年度本校中学校一年生（二二名）に対し、『竹取物語』の全体を読み進めた後で発展学習として行ったも

のである。用いた絵画テキストは、国立国会図書館蔵『竹取物語』（以下、国立国会図書館本）と龍谷大学図書館蔵『竹取物語』（以下、龍谷大学図書館本）。共にかくや姫が月に帰る場面である。

中将に、天人とりて伝ふ。中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のほりぬ。

では、二つの絵画は本場面をどのように語り出しているだろうか。両者のかぐや姫の描き方には共通点が二つある。それはかぐや姫が「天の羽衣」ではなく十二単を着ている点と地上を振り返っている点である。そしてこの点は、物語とは異なる。物語では、「天の羽衣」を着たかぐや姫は「物思ひ」が無くなって天に昇っている。したがって、物語を忠実に描こうとすれば、「天の羽衣」を着たかぐや姫が、地上ではなく天上に向かって昇っていく姿を描くことになるだろう。しかし、両図はそのようには描いていない。「天の羽衣」を着ず地上を振り返っている描写からは、かぐや姫の地上への未練を読み取ることができる。両図は物語内容を改変して、かぐや姫の翁や姫、帝への思いを語り出しているのである。

また、両図は構図において相違点がある。それは地上の人物の配置である。国立国会図書館本が頭中将をかぐや姫に最も近い位置に配置し、翁や姫はその背後に配置する一方で、龍谷大学図書館本は翁と姫をかぐや姫に最も近く配置し、頭中将は翁と姫の右脇に配置

している。かぐや姫は天界に際して、翁と姫、帝にそれぞれ手紙を書き置くが、国立国会図書館本はかぐや姫と翁、姫との別れを焦点化して語り、龍谷大学図書館本はかぐや姫と帝との別れを焦点化して語っている。このように両図の（絵語り）は異なる点もある。

では、このように物語を語る絵画テキストは、どのように活用できるのだろうか。まず考えたのが（絵語り）と物語の語りの違いを問題とする活動である。先に述べたように両図は、物語の「物思ひなくなりければ」を語り出していない。しかし、かぐや姫の「物思ひ」が無くなり地上の者との別れが永遠のものになってしまふことは物語にとって重要なことである。かぐや姫との別れが永遠であるがゆえに、翁や姫、帝の悲しみは深く嘆きも激しいものとなる。そして、かぐや姫の残した不死の薬を翁は「なにせむにか命も惜しからむ。誰ためにか。何事も用もなし」と言つて飲まず、帝は「あふこともなみだにうかぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ」という文とともに「ふじの山」で燃やしてしまうのである。こうした物語の結末からは、『竹取物語』が人間の（生）を有限のものとなまざし、その有限性を生きた人間はどう在るのが望ましいのかということを問うていることがわかる。こうした「竹取物語」の語り（絵語り）と比較することでより鮮明にし、物語を読み直したり、読み深めたりすることができると考えた。そこで、本学習においては、かぐや姫の顔の向きに注目させることを主な活動とし、自分が絵師だったらどう描くかという問いの答えを考えさせることで、両図の（絵語り）を批評させようと考えた。また、それだけでなく両者の構図を比較することで絵画制作主体の読みによって表現が大き

く異なることについて考えさせようとした。活動内容は次の通り。

- 1 国立国会図書館蔵『竹取物語』と本文との違いを見つける。
- 2 1で出た気づきの中からかぐや姫の顔の向きが違うことに焦点をあてる。

3 絵画が語り出している物語を考え、『竹取物語』の内容とは異なることに気づかせる。

4 自分が絵師だったらどう描くか考える。

5 龍谷大学図書館蔵『竹取物語』と国立国会図書館蔵『竹取物語』の違いを見つける。

6 5で出た気づきの中から翁と姫、頭中将の配置の違いに焦点をあてる。

7 それぞれの絵画が語り出している内容を考え、(絵語り)の違いに気づかせる。

8 自分が絵師だったらどう描くか考える。

では、本活動を通してどのような学びがあったのだろうか。次に見ていきたい。

(1) 物語を読み深める

「江戸時代の絵師は『物思ひなくなりにければ』を変更してしますが、あなたならどうしますか。」という問いに対して、二通りの答えがあった。一つは、絵画制作主体の改変を肯定的に受け取るもの。学習者の望むかぐや姫と地上の者との別れと(絵語り)とが一

致したようだ。

- ① かぐや姫が翁の方を向いているのは、文章とはちがうけれど、感動する最後としてふさわしいものだと思った。
- ② 江戸時代の絵師と同じように、本文とは少し違った絵に仕上げると思う。

なぜなら、天の羽衣を来てもなおかぐや姫は、翁と姫との絆の深さを表す方が、物語にとって良い方向になるから。

もう一つは、物語をもう一度読み直し答えを考えたいもの。

- ① 僕は本文の通りにした方が良いと思います。かぐや姫は衣を着る前、手紙を書くなど様々な事をしました。それは、物思いがなくなってしまうから、今のうちに、という考えで行動したのだと思います。だから、言い方はおかしくなりますが、かぐや姫の意志、決心を汚さない為にも、本文にそうようにした方が良いと思います。

② 僕だったら、感情を無くして翁たちの方を見ていないような絵が適していると思う。理由は、かぐや姫が感情をなくして月に帰る翁たちの事を忘れてしまうようなことになってしまいかもしれないという事が、この場面で重要な理由となると思うから、絵本の挿絵として忠実にかく。

このように絵画制作主体の改変に注目することで、物語をもう一

度読み直し、理解し直すことができる。また、本学習の「まとめ」には次のようにあった。

かぐや姫との別れについて軽く考えていた部分があつたけど、今回の授業を通して別れについて色んな方向から考えることができた。

かぐや姫との別れは一生の別れになるとも重大なものなんだなと思った。かぐや姫に感情がなくなってしまうえば、かぐや姫を思うことも難しいだろう。当然である。かぐや姫が何を考えているのか想像もつかないのである。何も考えていないのだから…翁は別れでかぐや姫を思うこともできず、当然ながら思われることもできなくなるのである。

このように絵画制作主体の改変を問題とし考えさせることで物語をもう一度読み直し、他者と意見交流をする中で、自身の読みを振り返り、さらに物語を読み深めることができる。

(2) 物語の作者について考える

先にみたように、(絵語り)を批評することで物語を読み深めることができる。ただし、絵画テキストを読ませる学習の効果は、「物語」の理解を深めることにとどまらない。(絵語り)と物語の語りとの間を行き来する中で、学習者には物語の作者が意識されたようである。

○作者の考えや思いを問題とする意見

①挿絵も、様々な視点から見でみることで、竹取物語の作者や絵師の思いが伝わってきました。

②どちらの絵もふり返っているのを見ると、その時代の人々の考え方や作者の考え方が違うのが分かる。

③作者は本当にあの絵を描いてほしかったのか。

○作者の意図を考える意見

①どうして作者はかぐや姫の感情をなくそうとしたのか疑問に思う。

②何を伝えたい物語なのか、ということを考えれば、挿絵の意味や登場人物一人ひとりの行動の意味も、よく分かってくると思った。

③「竹取物語」は作者不明なので本当はどう考えていたのかを予想することもできないのが残念です。(作者がわかっているならば、その人について調べればなにかわかるかもしれない。)

④かぐや姫はなぜ記憶をけしたか、つまり、作者はなぜかぐや姫の記憶をけしてしまうストーリーにしたのだろうか。

⑤なぜ竹取物語の作者はかぐや姫の感情をなくしてしまったのだろうか。何かメッセージがこめられているのだろうか。

(古典に親しむ) ためには、古典テキストの向こう側にいる古人の「問いかけ」と対話することが必要不可欠である。(絵語り)と

物語の語りと比較することで、古典テキストの向こう側にいる古人を想像し、その「問いかけ」を考えようとすることは、〈古典に親しむ〉ことに直結することである。

(3) 表象について考える

物語の語りと（絵語り）を比較し、さらに語りの異なる絵画テキストと比較することで、表象について考えることができたようだ。「まとめ」には次のような意見があった。

○絵画には絵画独自の意味があること

①この授業を通して、絵の一つ一つに意味があり、考える点があることが分かりました。他の絵にも意味がありそうなので調べたい。

②私は挿絵の深さについてとても学べたと思います。挿絵は文章をより分かりやすくするためのものであるのに、それどころかよく見てみれば本文と違う箇所もでてきたのでおもしろいと思います。

○絵画の向こう側に物語を解釈し表現する主体がいること

①挿絵というのは本文の内容をそのまま表すだけでなく、絵師の感情など、深いものをたくさんつめこんだものだと思います。

②二つの絵を比べることで様々な疑問が浮かんだが、絵師の考えが含まれているのだなあと思った。

③江戸時代の絵師が物語の内容を変更しているという事にも、少し納得できることがある。

絵師の客というのは絵を見てくれる人であり、絵が面白くないと絵師としての仕事の意味が無い。客の存在を気にして絵を描くとすると、とても悲しい感情の無い別れの絵より、感動のある別れの方がいいと思ったのだろう。

時代の変化によっても昔の物を少し変えてみるということも必要なだろうと思う。伝統工芸品を現代風のものにアレンジしているのと似たようなものを感じた。

このように絵画には物語とは別の、独自の意味があることや絵画の向こう側に物語を解釈し表現する主体がいることを考えることができたようである。

(4) 古人の古典享受について知る

江戸時代の人の『竹取物語』への「解釈」と「表現」を問題とすることで、古人の古典享受について知ることができたようだ。

①今日の補習で歴史の中で内容が少しずつ変わっていくことがよく分かりました。変え方はその絵師の都合がいいようになっていいると思います。

②時代とかそういうので、人の感覚というのは変わるのだと改めて思いました。江戸時代の人は、かぐや姫をいい人に見せようとしたり、竹取物語全体を恋物語にしたり、少し感情に

まかせすぎだなど思いました。

③『竹取物語』は何年も前に書かれた物語なのに今でも共感できる点や納得できる点がいくつかあるからすごいと思った。それに読めば読むほど考えれば考えるほど楽しくなり、物語の真意がわかっていくところもすごいと思う。こんな点があるから、『竹取物語』は何年たっても親しまれ、人々の心に残っていくのかな、と『竹取物語』のすごさや深さを改めて味わう一時間だったと思う。

①と②の意見にあるように、本学習を通して、古典が長い歴史の中で、時代によつて様々に読み継がれてきたことを知り、また③の意見にあるように、『竹取物語』の魅力を再確認しながら、同時に『竹取物語』が読み継がれてきた理由を発見しようである。こうした古人の営みを知ることが、古典世界への理解を深め、ひいては〈古典への親しみ〉を醸成することとなるだろう。

4 おわりに

現在絵画テキストはその〈絵語り〉が分析されないまま、文字テキストをよりよく理解するための「補助資料」として教科書に掲載されている。おそらくその原因は、絵画は物語を忠実に再現したものであるという教科書編集者の〈絵画〉観にあるのだろう。しかし、みてきたように〈絵語り〉を分析し活用することで、物語を読み深めるだけでなく、古典テキストの向こう側にいる古人や表象に

ついて考えたり、古人の古典享受の有り様について知り古典世界への理解を深めたりすることができる。

冒頭の引用で三田村氏が述べているように、『源氏物語絵巻』のように物語の内部まで深く読みこんでいる絵画テキストもある。その一方で、江戸時代に制作された『竹取物語』のように物語への理解が浅いものもある。しかし、物語を矮小化しているからといって活用できないわけではない。〈絵語り〉を分析し活用することで、古典学習を拡充することができる。今後も古典学習の拡充に向けてさまざまな種類の〈絵語り〉を分析し、活用を考えて実践していきたい。

また、〈絵語り〉を読ませることは、同時に絵画テキストの読者を学習者に与えることになる。先に見た学習の「まとめ」には絵画独自の表現に着目した意見もみられた。

○モチーフの有無について

①龍谷大学所蔵の「竹取物語」の絵に護衛役が描かれていないのか。

②なぜ不老不死の薬がないのか分からなかった。

○絵師の〈天界〉観について

①なぜ天人の中に男性がないのか。

②国立国会図書館所蔵の方で天人の一人が笛らしきものを持っているがなぜ笛をかけたのだろうか。

○構図について

①かぐや姫と会えるのはもう最後なのになぜ翁と姫はもつとかがや姫に近よったりせず、泣いているだけなのか疑問に思った。

②龍谷大学と国立国会図書館の絵では、かぐや姫と翁達のキョリが違うのは考え方が違うのではないか。

○絵画独自の語り口について

①どうして屋根やかべは絵に描かないのだろう。

②国立国会図書館の絵は天人たちが乗っている雲がずっと続いているように見えるが龍谷大学の絵は雲が続いていない。

(井上注、「雲が続く」とは霞のこと)

③二つの絵の使者の中に翁達に目線を向けている使者がいるのでなぜだろうと疑問に思った。

このように絵画を読み解く活動を行えば、自然に絵画テキストの読み方にも興味をもつ。絵画テキストを読み解く活動を行うことで絵画テキストを読む方法を与えていくことも可能であろう。今後は、古典学習の拡充に向けて絵画テキストの活用を考えるとともに、絵画テキストを読む方法をいかに与えていくのかということについても考察していきたい。

【注】

1 佐野みどり、三田村雅子、河添房江「描かれた源氏物語―復元

模写を読み解く」(八〜九頁。源氏物語をいま読み解く①『描かれた源氏物語』、翰林書房、二〇〇六)

2 三田村雅子「草木のなびき、心の揺らぎ 源氏物語絵巻を読み直す」(四〜五頁。フェリス女学院大学、二〇〇六)

3 絵画の注文主や実際の絵師など絵画の制作に関わる主体をここでは絵画制作主体と呼ぶ。

4 本稿では絵画制作主体の画題への「解釈―表現」過程を〈絵語り〉と呼ぶ。〈絵語り〉については、以下の拙稿にて論じている。

「〈絵語り〉論序説」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第五号、広島大学大学院教育学研究科、二〇〇七年三月、四七九〜四八六頁)、「信貴山縁起」(『信貴山縁起』(『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第五六号、広島大学大学院教育学研究科、二〇〇七年二月、三七四〜三八二頁)、「兵庫 泉極楽寺蔵『六道絵』の〈絵語り〉」(『國文学攷』二〇〇号、広島大学国語国文学会、二〇〇八年二月、一〜一五頁)。

5 ただし、例外もある。『中学校 国語1』(学校図書)には「宇治拾遺物語」第一〇四段「獵師、仏を射る事」の学習にあわせて『法然上人絵伝』巻七が掲載されている。本図は、修行者の前に普賢菩薩が現れた場面を描いたものである。教科書「学びの窓」(二二六頁)には、

③二一〇頁の『法然上人絵伝』の絵は当時の人々のどのような考え方に基づいているか、それに対して『宇治拾遺物語』に表された考えはどう違うか、話し合おう。

とある。本教科書では、『法然上人絵伝』での「法華経」信仰者

の語られ方」と『宇治拾遺物語』でのそれとを比較することで、『宇治拾遺物語』の「考え」の位相を明らかにしようとしている。このように（絵語り）を用いて学習に拡がりをもたせようとするものもある。

6 これまで以下の拙稿にて絵画テキストの活用の提案と実践の報告を行っている。

「教材としての絵巻（1）―古典学習の拡充に向けて―」（『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第五二巻、中国四国教育学会、二〇〇六年三月、四五六―四六一頁）、「教材としての絵巻（2）―古典学習の拡充に向けて―」（『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第五四巻、中国四国教育学会、二〇〇八年三月、四六五―四七〇頁）、「教材としての絵巻（3）―古典学習の拡充に向けて―」（『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第五六巻、中国四国教育学会、二〇一〇年、四三―四八頁）、「教材としての絵巻（4）―古典学習の拡充に向けて―」（『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第五七巻、中国四国教育学会、二〇一二年三月、六四六―六五一頁）。

7 本場面を描いた『竹取物語』の挿絵の使用について中島和歌子「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性」・『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類」（『札幌国語研究』一二、北海道教育大学国語国文学会、二〇〇七年）がある。中島氏も絵画テキストの語りを問題とすることで「物語の理解を深める」という活動を提案している。

【依拠本文】

新編日本古典文学全集（小学館）：『竹取物語』

（広島大学附属福山中・高等学校）